

fure-fure

看護技術を適切に実践するためには、基盤となる正しい知識の獲得と、確実な手技の習得が求められ、手技に習熟するには繰り返しの練習が必要となります。しかし、実習室は正課の授業に使用することが多く、これまでは学生の皆さんが空きコマを活用して自由に技術練習をすることが難しい状況にありました。そこでこの度、看護学部棟1階のエレベーター前ホールを看護技術の自己学習室として整備しました。その名も「Nursing Skills Training Room (ナーシングスキルトレーニングルーム)」です。授業で学んだ基本的な看護技術をトレーニングにより磨き、看護実践に必要なスキルとして身につけてほしい、そんな願いを込めて命名しました。

室内には、ベッド3台、CPS装置(酸素吸入と吸引が使用できる装置)、血圧測定シミュレーター、胸部聴診シミュレーター、モデル人形を設置しています。主に血圧測定、呼吸音聴診部位や聴取音の確認、酸素吸入、吸引、体位変換の練習を行うことができます。また、実習室や準備室から物品を持ってきて、更衣や清潔ケアなどの練習をすることもできます。

使用できるのは平日の午前9時～午後6時で、事前予約は不要ですので、気軽に利用していただけます。廊下側がガラス張りになった室内は明るく、室内の様子が外からよく見えます。他の学生さんが練習している姿を目にすると、きっと“自分もやってみようかな”という気持ちが湧いてくることでしょう。授業で学んだ看護技術の反復練習や、臨地実習で患者さんに実施する前のトレーニング、卒業前のブラッシュアップなど、ぜひ積極的に活用していただければと思います。



■イケあい地域災害学生ボランティアセンターの活動について 代表 眞瀬 桜花 (2回生)

「能登半島地震被災地でのボランティア活動」

イケあい地域災害学生ボランティアセンターでは、南海トラフ地震が起こった時、自分たちが地域とボランティアをつなぐ窓口となることをめざして、日頃から地域の活動や防災イベントに参加しています。

昨年の9月、令和6年1月に発災した能登半島地震の被災地である輪島市でボランティア活動を行いました。仮設住宅への移行が進むにつれ、住民同士の交流も希薄になっているということで、私たちは仮設住宅の集会所や近くの公民館で集いの場を設け、パラリンピックでも有名になったボッチャと、ちぎり絵やハンドマッサージ、簡単にできる蒸しパン作りを行いました。参加者は、仮設住宅に暮らす高齢者が主で、「みんなと楽しめる機会があると嬉しい」「若い人と話したら元気が出た」と喜んでもらうことができました。活動に参加してくださった方々は明るく見えたが、話を聞くと皆さんそれぞれに過酷な体験をされており、進まない町の復旧に葛藤する日々であることを語ってくださいました。地震発生から9か月経過していましたが、未だ被災したことを受け入れられない人と復興に向けて動き出している人が混在している状況でした。発災時の状況や避難生活についても詳細に聞かせていただき、授業やネット情報からではわからない災害の恐怖や避難生活上の困難について、理解が深まりました。



ボッチャ:まずは練習「ここをよくねらって！」

また、ちょうど後半グループが帰高する日、現地は能登半島豪雨によって更なる被災をしています。早朝から土砂崩れ警戒警報が発令されたため私たちは予定を早めて帰路に就き、直接被害を受けることはありませんでした。しかし、自分たちの思い入れのある場所の更なる被災に恐怖を感じると共に、高知に着いてからも現地で出会った方々の安否が心配でした。今回の貴重な経験は、南海トラフ地震に備える今後の活動に活かしていきたいです。

なお本活動に際しましては、同窓会の他、本学後援会からも主に現地までの交通費についてご支援をいただきました。活動地は遠隔地であったため、お陰様で安心して現地まで往復することができました。ご支援いただき誠に有難うございました。



参加してくださった皆さんとの記念写真



- 表紙の写真(上から時計回り)
 2回生: ピザ焼き体験
 3回生: 実習前の演習風景
 1回生: ふれあい看護実習
 4回生: 卒業論文完成!



学部生へのメッセージ

学生部長 長戸 和子

こんにちは。学生部長の長戸です。

2024年度、本学は組織再編を行い、学生生活をサポートする部門は、これまでの学生支援部学生・就職支援課から、教育・学生支援部教務・学生支援課へと変わりました。教務・学生支援課は、名称からおわかりかと思いますが、カリキュラムや科目の履修などに関することを扱う教務部門と、学生生活や就職に関する支援を行う学生支援部門の2つに分かれています。そして、私は、学生部長という立場で、学生支援担当の事務職員の皆様、4学部・2研究科の先生方と教職協働のもと、学生委員会およびキャリア支援専門委員会の委員長として、両キャンパスの学生の皆さんの学生生活、就職活動の支援にかかわっています。

具体的には、奨学金や授業料免除、障がいのある学生への支援など、学生の皆さんが安心して学習に取り組めるようにするためのサポートや、課外活動やクラブ活動、ボランティア活動、学生寮の運用や寮生活に関する相談対応など、豊かな学生生活を送れるようにするためのサポート、交通安全講習や健康講座、健康相談など、心身の健康を保てるようにするためのサポートなどを行っています。また、就職活動に関しては、インターンシップ講座や公務員試験対策講座、業界セミナーなどの開催の他、履歴書添削や模擬面接など個別の支援にも力を入れており、その結果、高い就職率を維持しています。

これらの活動は、教員もちろんですが、学生支援担当の職員の方々に負うところが大きいです。職員の方々は、学生の皆さんが安心・安全で楽しい学生生活を送ることができるように、そしてそれぞれの夢を叶えられるように、そのために何が必要か、ということに常に考えてくださっています。私の役割は、学生や教員の視点からニーズを把握し、職員の方々と共有してよりよいサポートのありようを考えることだと思っています。これからも教職協働で学生の皆さんの支援に取り組んでいきたいと思っています。



学生支援担当の職員の方々と

異文化理解看護フィールドワークについて

国際交流センター運営委員 川上 理子

2024年9月2日～9月10日に異文化理解看護フィールドワークの受講生8名(2023年度受講生3名、2024年受講生5名)と教員2名(川上理子、田之頭恵里)で、インドネシアガジャマダ大学看護学科に短期研修に行きました。

ガジャマダ大学は、インドネシアの旧首都であるジョグジャカルタにあるマンモス規模の国立大学で、2013年に国際交流協定を締結後、主に看護学部間での交流があります。

今回、学生間交流では、ガジャマダ大学の学生さんに対し、本学の学生がパワーポイントで自己紹介や高知県の様子、日本の医療に関わる課題、折り紙を紹介し、動画を使って一緒に折り紙をしました。また、ガジャマダ大学で基礎看護学と救急看護学を担当されているSyahirul Alim先生より、①インドネシアの医療制度と健康課題、②簡単なインドネシア語とインドネシアの文化について英語での講義を受け、インドネシアと日本の医療・看護の課題の違いについて学びました。さらに、ガジャマダ大学のメインの実習病院となるアカデミックホスピタルの見学、保健所見学、市町村の保健活動(この日は高齢者健診)も見学し、日本の病院看護、地域看護との類似点や相違点、対象者の類似点や相違点について学びました。



休日にはガジャマダ大学の学生さん達がアテンドして下さって、ムラピ火山のジープツアー、ボルボドゥール遺跡(世界遺産)やクラトンパレス遺跡の見学、マリオボロ散策をしました。

参加した8名の学生は、非常に積極的にインドネシアの人々の生活・文化について学びながら、健康問題や課題についても考察し、ガジャマダ大学の学生さんとの交流を深めました。インドネシアで交流したガジャマダ大学の学生さん5名は、2024年10月に本学の看護学科での短期研修に参加し、本学の学生さんとさらに交流を深め、現在もその交流は続いています。

各学年の学生生活

■1回生■



1回生は、12月と2月に初めての臨地実習となる「ふれあい看護実習」がありました。写真は学内実習の様子ですが、宅老所での実習では、学生が企画したレクリエーションや高齢者との昼食などを通じて、地域で暮らす異なる世代の人々の生活の様子を知ることができました。また、高齢者との触れ合いやコミュニケーションを通して、その人の生き方や価値観を尊重し、その人らしい生活を支える専門職としての基本的な態度を身につける大切さも学びました。

その他、サークル活動やボランティアへの参加など、学内外の課外活動にも積極的に参加し、一人ひとりが自分の目標に向かって取り組んでいます。

1回生学年担当:瓜生・村川・田之頭

■2回生■



2回生は8月～9月にかけて、初めての病院での臨地実習「看護基盤実習」がありました。1回生から学んできた医学的な基礎知識や看護の専門科目の知識などをつなぎ合わせて、実習に臨みました。看護学生として病院という場で実習させていただくという期待とそれを上回る緊張感がありましたが、患者さんとの一期一会の出会いに感謝し、看護師の皆さんの働く姿を通して新たな看護への魅力を感じていました。

また、看護地域フィールドワークに取り組んでいる学生たちは、地域に赴き地域の活動に参加しながら、多様な考え方や価値観について理解を深めることを体験しています。高知県の山間部で暮らす方々に協力いただいた学生グループは、その地域の特産物である「イタドリ」「四方竹」の栽培について話しを伺い、その食材を使用したピザ焼きに参加させていただきました。

これらの実習を通して、看護の対象となる人やその人を取り巻く環境を理解し、これからも勉学や学友との交流に取り組んでいきます。

2回生学年担当:高谷・岩崎・塩見

■3回生■



3回生の後期は、授業に加えてこれまで学んできた知識、技術を活用してよりよい看護実践について実習を通して学んでいます。10月から2月にかけては、精神看護、小児看護、地域看護、急性期看護、慢性期看護、母性看護の6領域を経験する領域看護実習を行っています。臨地実習で対象の理解、アセスメント、看護技術について学び、学内では実習の場面を想定して看護技術の確認、実習で経験したことを振り返り今後の改善策を明確にするなど、ケアの対象となる人の健康、日常生活を維持・回復するための看護職の役割について学んでいます。

3回生はこれから、就職に向けた準備も本格化していきます。看護実習を通して、一人一人が看護専門職としてのあるべき姿を見出すとともに社会人基礎力を高め、いくことを期待しています。

3回生学年担当:小澤・山中・源田

■4回生■



「4年間の成果!卒業論文を提出しました」

4回生は、4年間の集大成として卒業論文(看護研究)を提出いたしました。この1年間、研究に取り組む中で多くの困難に直面しながらも、指導教員や友人たちの支えのおかげで、最後までやり遂げることができました。研究を通して、意外な発見や興味深い結果が得られ、看護の新たな知見を得ることの重要性や、わからないことを探求していく面白さを学びました。また、論文作成にあたり論理的思考力を養い、問題解決能力を高める中で、仲間とのやり取りや議論が刺激になり、視野が広がりました。研究を通して得られた知識や経験は、これから看護専門職者となる4回生にとってかけがえのない財産となります。研究にご協力くださった対象者の皆様、ご指導いただいた先生方をはじめ、いつも応援してくださったご家族の皆様から心から感謝いたします。

4回生学年担当:藤田・有田・竹中・徳岡